
誰かが紡ぐ御伽噺。

幻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰かが紡ぐ御伽噺。

【Nコード】

N49960

【作者名】

幻影

【あらすじ】

異世界【エレウテリアー】の物語。誰かが紡いだお話を覗いてみませんか？

作風、視点、場所、時間軸バラバラで世界設定のみ共通の短編集。人物紹介は随時更新*作者の別作品【竜の園】と同じ世界観です。もしかしたらそちらの番外編も書くかも*

御伽噺の登場人物。(前書き)

はじめまして。

別作品を読んでいただいたことがある方には、おはようございます、こんにちは、こんばんわ。

日頃の鬱憤を掻き集め、原動力としたいと思います。

内容に関しては作者の気分によって変わると思われますが、基本は何てこと無いファンタジーです。もしかしたら、苦手な恋愛、好きだけど書けないグロテスクもあるかもしれませんが。

話数に比例して増えていくであろう登場人物たちです。

好きなキャラを教えてくださいできれば、作者のテンションと意欲と共に、出番も増えると思いますので、もしそんなキャラがいれば気軽に報告してください。

感想付きなら更に効果倍増です。

御伽噺の登場人物

デファンデュ・シュナイデン

フランス語で禁断。姓はドイツ語で切る、断つ。

白髪、赤と青のオッドアイ。黒く小さい羽を持つ。

悪魔と人間の間の子で、兄がいるらしい。

【青の団】団長で、ウイズダムの部下。

ウイズダム・コルテージュ

英語で賢明、英知、知恵。姓は古いフランス語で（王侯貴族などの）従者。

水髪藍眼。髪は肩下ほど。

自分に敵しく他人にも敵しい王国の魔術使長。

タバタ・ハーゲンダッツ

友人T考案のキャラ。姓はあのアイスから。

茶髪の三つ編み、桃色の眼で眼鏡。

独特の喋り方で、少々過激。

【赤の団】団長で、ウイズダムの部下。

？

灰髪藍眼。

帝国の塔に幽閉されている。

古代の遺産の【鍵】を知る少女。

?

【処刑人】と呼ばれる帝国の隠密部隊員。
壊れたような口調が特徴。

人としての感情が大幅に欠落している。

エリユティア

紅き乙女の意。

黒髪紅眼。

【黒き民】と呼ばれる亜人種で、第一皇子の側近。
子供らしい無邪気さが可愛らしいが、発言は危険なものが多い。
帝国一の拷問官。知る人ぞ知る狂人。

カーネ・フェデーレ

イタリア語で忠犬。

朱髪緋眼。

第一騎士団の団長。不良のような言動が目立つ。

シュティル

ドイツ語で無口な、静かな。

黒髪朱眼。

【黒き民】で第四騎士団の団長。

かなりの無口で、真面目ながらも近寄りがたい。

フォンセ

フランス語で闇。

紫髪朱眼。

第四騎士団に所属。何故か団長の恋人となっている。
現実主義者で真面目。任務はしっかりとこなす。

魔術使の見送り

「 ウィズダム様？ どこに行かれるんです？ 」

私は珍しく出かける様子の上司、ウィズダム・コルテージュ様に
問いかけた。

王国の色である白のローブを纏う姿は、その顔の良さも相まって
かなり好みだが、ウィズダム様は黒とか青とか、暗い系の色の方が
似合う。絶対。

水色の髪を揺らし、かなり威圧感のある藍色の瞳を私に向けて、
嫌そうに言う。

6

「 帝国に用がある。タバタも連れて行くぞ 」

「 はい。あ、早く帰ってきてくださいね？ 」

「 当たり前だ。敵国に長居などするか 」

ふん、と学校とかなら絶対に嫌われるであろう傲慢な態度で、ウ
ィズダム様は私に言う。

しかし、私はこの傲慢さこそがウィズダム様がウィズダム様であ
る証拠だと思うのだ。

同僚であるタバタ・ハーゲンダッツにそう言うと、激しく同意さ

れた。寧ろウイズダム様から傲慢を取ったら知識しか残らないと言われた。私も激しく同意する。

王国の王宮魔術使長、ウイズダム・コルテージユ。

私はエリート中のエリートである彼の部下だ。

そして、おそらく誰よりも彼を尊敬している。

「……それまで、留守は頼む」

呟くような一言を私は逃したりしない。

心の中に春が来るのを感じながら、背を向けて行く彼に、見えな
いながらも満面の笑みで応える。

「はいっ」

自分に厳しく他人にも厳しいウイズダム様は、誰も頼ったりしな
い。

だからこそ、こういう一言が嬉しいのだ。これは一番彼に近い私
の特権だと思う。

……本人に言ったら、殺されるだろうけど。

去り行く後姿を見ながらそう思っていると、後ろから声が聞こえ
た。

「ちょ、ちょい待ち！ 置いていく気か！..!」

独特の喋り方をするのは、同僚のタバタ・ハーゲンダッツ。
茶色の髪を三つ編みにして桃色の瞳に眼鏡を掛けているその姿は
大人しそうに見えるが、中身は思いつきり凶暴。
その上魔術は上手いのだから、私とウイズダム様ぐらいしか止め
る人間がいない、いわゆる問題児。

「……二分三十秒の遅刻だ。待つ理由が無い。指定時間までには来
い」

「わるうございました！　せやからって置いて行く気か？」

「ああ」

「ひどっ！　我が上司ながら酷いやろ？」

がつくりとうなだれるタバタを無視して、ウイズダム様は歩いて
行く。タバタも置いて行かれるか、と半分意地で付いていった。

いいなあ。私もウイズダム様と行きたい。

しかし、王宮魔術使のトップスリーが全員出かけるわけにもいか
ず、私は大きく溜め息を吐いた。

「早く帰ってきてくださいね、ウイズダム様。私と溜まった仕事が
待ってますから」

少し皮肉を交えて、私はそう呟いた。

悪魔の証明

鏡を前にして、私は大きく溜め息を吐いた。

ショートカットの白髪はまだいいが、この瞳だ。

青い右目と、蛇のような赤い左目。お前は悪魔の子なのだと、知らしめるように見える。

背には黒く小さな翼。これも悪魔の証だ。人間がこんなものを持つわけがない。

「うう。このローブ大きいんだよう」

王宮魔術使の白いローブは、小さな私を想定したものではないので、かなり大きい。ぶかぶかで床を擦ってしまうので、袖は折って縫っている。

胸元には青い宝石があり、私は密かにそれを気に入っていた。何故って、私の右目と同じ色だからだ。

人間の、瞳の色と。

悪魔と人間の間の子である私の、人の部分。悪魔の血の方が濃い私にとって、ただひとつ、人間であることの証。

黒い羽も、蛇のような赤い瞳も、奇妙な形をした耳も、全ては悪魔のものだから。

「ああ、仕事しないと……。帰ってきたらウイズダム様はまた徹夜なんだろうね……」

くるりと身を翻し、部屋から出る。

城の一角である、王宮魔術使用の塔。王宮魔術使でも一部の者だけしか自由に入りにできない場所に私はいる。

【青の団】の団長である私、デファンデュ・シュナイデンの権限を持って。

王国の王宮魔術使は、その得意分野により、二つの団に所属する。純粋な魔術の力を持つ者は、【赤の団】に。

魔術の知識が豊富な者は、【青の団】に。
ウイズダム様だけは例外で、その二つの頂点に立つ魔術使長だけれど、他は二つに分かれている。

私は【青の団】の団長。ちなみに、タバタ・ハーゲンダッツは【赤の団】の団長だ。

タバタは純粋に強い。他の魔術はほとんど駄目だが、こと土の魔術においてはウイズダム様をも上回る。そんな実力があつたからこそ、団長になることができた。

対して私は、知識重視の【青の団】では確実に一番強いだろうが、ただそれだけだ。そんな私が団長になれたのは、ウイズダム様の推薦があつたから。

家柄を重要視する王国で【御三家】と呼ばれる名家の一つ、コルテージユ。そんな家の、しかも魔術 使長の一言に、国のお偉いさんも黙るほかなかつたらしい。

後ろ盾もない、しかも悪魔との子である私がこうしていられるのは、ウイズダム様のおかげなのだ。

そんなことを思いながら、塔の地下へと階段を下りていく。魔術使長の許可無しでは王しか、たとえ王子でも貴族でも入ることの許されない場所。

不気味なほど足音が響き渡り、壁の灯りの炎が揺れる。魔術によって施された、消えることも燃やすこともない、灯りのための炎。

地下一階まで辿り着いて、私は扉を開ける。螺旋階段はまだまだ続くが、私が入ることを許されているのは地下五階まで、緊急時には地下七階までだ。どこまで下があるのかは代々の魔術使長と王くらいしか知らない。

ちなみに、地下一階から地下三階は牢屋だ。あまりに凶悪で特殊な魔術を施す必要がある場合のみ、ここに収容される。

ここにいる囚人はたった二人で、あまった牢は別の用途に使っているのだが。

「ご飯の時間だよ。起きて」

薄暗い闇の中に呼びかけると、獣の唸り声が聞こえた。

普通なら恐怖を感じるほどの声だが、別に威嚇をしているわけではないので、私は別段気にしない。寝ぼけているだけなのだ。

ちゃっ、と硬いものが石の床に触れる音がし、暗闇の中で金色が光った。

「おいで」

ちゃっ、ちゃっ、と爪の音を立てながら、ゆらりと現れる。

ほのかな灯りに照らされたのは、三つ首の獣。

真っ黒な体に、金色の六つの瞳だけが妖しげに光る。かなり怖い顔をしているが、害はない。私には。

魔獣であるこの子は、ウィズダム様の研究材料になるところだったのだが、私が無理を言っただけで今は私のペット状態だ。悪魔の子である私を主と判断しているのか、私には従順でかなり賢い。

契約はしていないのだが、私の使い魔のようなのだ。この地下一階で放し飼いにしており、万が一侵入者が入った場合は攻撃するよりに命令している。

私を乗せて走れるほど大きいその子の、一つの頭を撫でる。頭は個々に別物のようで、他の首が羨ましそうにじい、と見つめていた。

「ああ、おなか減ったよね」

嬉しそうに、三つの首が吠えた。

囚われの歌姫

幼い頃から、窓から見える景色だけが私の世界だった。

帝国の高い高い塔の最上階に私はいる。出ることは許されず、ただ塔の中でだけ自由を与えられた。

それは、まるで籠の中の、飛べない鳥。

逃げる術もなく、ただ生きていくだけの私。物心ついたときには既にこの塔の中で、外を望まなければ何不自由無い生活を送っていた。

全ては我が一族の罪のため。

「フフフ。ドウカナ？ 歌を歌う気になったのカナ？」

壊れたような口調が、幼い頃から大嫌いだった。

窓の外を見ていた私は、その不愉快な声に振り返る。そこには黒一色のローブを着た人がいた。

背は私よりも高く、顔はすっぽりとフードを被っているからわからない。ただ、その闇の中に黄色の瞳が光っていることだけがわかる。

五年ほど前から私を監視し、まれにこうして話しかけてくる【処

刑人」と呼ばれる男。名前も顔も知らず、ただこの帝国の隠密部隊に所属していることだけは知っている。

帝国の隠密部隊は、数も顔も名前も、誰も知らないと言われる。本当に存在するかすら疑われるほどに。

名前はわからないが、それぞれに通り名があるらしく、仕事ではそれを名乗るらしい。魔術使や騎士と行動を共にするときなどだ。

そして、この男のそれが、【処刑人】。

「……いいえ。心配などせずとも、私は死ぬまで【鍵】を使うことはないでしょう」

「ソウ？ それならいいんだヨ。つまらないケドね」

ケタケタと処刑人は笑った。

禁じられた古代の遺産。もうほとんど残っていないそのの、【鍵】である歌を、私は知っている。

どこにあるどんな遺産のものかは知らないけれど、けしていいものなどではない。

【鍵】を知っているのは、私だけ。

歌は私たちの一族の中でもたった一人だけが知っている。継承者となる者にだけ、その歌を先代の継承者が教えるのだ。

そして、その歌を継承せずに継承者は死ねない。

呪いなのだと聞いた。先代の継承者である、私の母から。

父は知らない。知っているのは、七年ほど前に死んだ、母のことだけ。

窓の外を知らない私に、いろいろなことを教えたのは母だ。ずっとこの塔に幽閉され、出ることの叶わない私に、外に出たことがあ

るといふ母は、いろいろなことを教えてくれた。

母がどういふ経緯でこの塔に入り、私を産んだのかは死ぬまで教えてくれなかつたけれど。父の存在も同様に。

「ソウソウ。今日は窓は閉めておくんだネ。第一皇子の奴隷が暴れるヨ」

知られてはならない私の存在。そのためならどんなことでもするのだろう。

ケタケタと笑う、その表情以外を私は知らない。まるで道化のように、常に笑っているのだ。

フードの中の闇に、口元だけが見えている。大きく弧を描く、まったく形の変わらない口元が。

「ええ。私は……ここで朽ちていくのですから」

自嘲的に、ほとんど確定している未来を告げた。

そう。まさか、この塔から出る日が来るなんて思わないで。

第四騎士団にて

「今日はここまでにする」

凜とした低音の、さほど大きいわけでもないのによく聞こえる声が響いた。

はあ、と辺りで疲労からくる溜め息が聞こえる。

帝国の片隅にある広い騎士のための訓練所。寒冷の土地のため緑は少ないながらも、夏だからか、訓練の後だからかとても暑い。

今日は七までである騎士団の内、第一騎士団と第四騎士団という、騎士団をよく知る人物なら首を傾げるであろう妙な組み合わせでの合同訓練だった。

おかしな組み合わせの原因は、二つの団の団長がこういったことを好まない性格だからである。

そして、この合同練習という名の喧嘩を引き起こしたのも、この二人だったりするのだ。

「ちっ。骨ぐらい折らせる」

「……無駄な労力だ」

舌打ちをした、赤い髪の青年が第一騎士団の団長。そして、無表情で呟いたのが第四騎士団の団長だ。

赤い髪と瞳という、目に痛々しい色彩と同じように、第一騎士団の団長、カーネ・フェデー様は刺々しい性格だ。好戦的で無慈悲。戦いの際は切り込み役となっている。

反対に黒い髪と朱色の瞳、どうみても昔に滅びたとされる亜人種【黒き民】の特徴を持つ無表情な第四騎士団の団長、シュティル様。冷静沈着、笑顔を見たことがないとされるほどの常時無表情。

カーネ様が一方的に敵意を持っており、嫌がらせのように訓練と名付けて喧嘩を吹っ掛けている。

騎士たちからすればいい迷惑だ。何故上司の私情に付き合わなくてはならないのだろう。

かくいう第四騎士団所属の私も不満を持っている。

そんなことを口にも出さず、私は顔には出ていないが疲れた様子のシュティル様にタオルを差し出す。

「お疲れ様です」

「……ああ」

そっけないように見えるが、返事をしてもらえるだけでいい方なのだ。彼は事務的なことでしかほとんど会話をなさない。

まあ、私にすら返事をしてもらえないとなると、私もいろいろとしなくてはならない。

何故なら

「はっ。職場でいちゃつくなよ。場所を考える、場所を」

イラついたようにカーネ様が言う。

そう。私はこの無口で無表情な上司の、一応は恋人というものに該当する。

……何故こんなことになったのか、私にもわからないのだが。

「おゝい、カーネ？ なぁにしてるのかな？」

「げっ」

にこにこ笑いながらそこにいたのは、第一皇子の側近であるエリユティア様だった。自身が【黒き民】であることを表す黒い髪と紅い瞳。それをカーネ様に向けている。

カーネ様は表情を固めた。

「こらっ。私情で権力を使わない。ルシファー様に告げ口しちゃうぞっ？」

「第一皇子に言うのはやめてくださいっ！」

「そっだよ。アヤメさんとの邪魔したら殺されちゃう」

切羽詰った声を出すカーネ様に、からかうようにエリユティア様は笑った。

ちなみに、アヤメというのは第一皇子の……恋人、らしい。噂になっただけなのでよくは知らないのだ。特に私は第一騎士団ではないから。

帝国の王族は皇子五人、皇女二人の七人。騎士団はその数だけあって、それぞれに仕えているのだ。

つまり、カーネ様はエリユティア様と同じ第一皇子に。私やシュティル様は第四皇子に。

数え方は第一皇子から一、第一皇女は六、第二皇女は七だ。かなりややこしいが、帝国の国柄から仕方ない。

実力主義、弱肉強食な帝国では、王族が最強。

「まあ、冗談だけどね。でもでも、サボリはいけないんだからね。というわけでお仕事」

「え」

ぴらり、と正式な仕事であることを知らしめる書状。

カーネ様は荒々しい性格とサボリ魔であることで有名だったりする。

「じゃあ、いこー!」

ずるずると、どこにそんな力があるのか、カーネ様を引きずって行ってしまった。

沈黙が辺りを支配し、ふと無言なシュティル様を見る。

「……フォンセ、帰るぞ」

「あ、はい。わかりました」

シュテイル様は私の名前を呼び、立ち去ろうと背を向ける。
こうして、慌ただしい合同訓練は幕を閉じた。

第四騎士団にて（後書き）

【竜の園】に出演しているヒロユウです。
偉いんです。立場的には。

反逆者に制裁を（前書き）

流血表現、及び何か気分が悪くなりそうな表現有りです。

エリュテイヤ好き、子供好き、女の子は可愛くあるべきだ主義な人は閲覧注意。

作者の言い訳は後書きに。

反逆者に制裁を

「逆らう者は皆殺し。それが帝国の第一皇子、ルシファー・アフトクラトル様のご命令だよ」

ふふっ、と血濡れのこの場所には似合わない笑顔で、エリュテイア様は言う。

壁や床、天井まで赤く染まり、噎せかえるほどの血の臭いが充満するこの部屋で、反逆者に死刑宣告とも取れる一言を放つ。

恐怖で絶句している反逆者たちに恐ろしい笑顔で可愛らしく言っているが、空気はぴりぴりと冷たい。

「さあ、言ってもらおうかな？ どうしてアヤメさんを拉致しようとしたのか」

その一言に反逆者の顔が一層青さめる。心当たりがあるのだろう。アヤメ様は第一皇子の恋人だ。かなり一方的な愛だとは思いますが、第一皇子にそんなことを言えるほどの度胸は俺にはない。

ともかく、何故いきなりエリュテイア様に仕事と称して強引に連れて行かれたのかはわかった。エリュテイア様は第一皇子の側近だ。そして、反逆者を見て少しだけ同情する。この顔は見たことがあ

る。確か帝国内の商人だ。

エリュテイヤ様は裏切りを絶対に許さない。というよりも、嘘を許さない。

帝国では作物があまり育たないため、商人はかなりの儲けを出す。帝国では国に被害を齎さないことを条件に国境を越えることを許可している。

それを、この反逆者は反した。

「お、お待ちください、エリュテイヤ様!!」

「何かの間違いでございます! もう一度お考え直してくださいませ

!」

「……そう? ふうん……」

につこりと笑う。駄目だ、かなり怒っている。俺の経験上、エリュテイヤ様は怒っている時ほどよく笑う。

反逆者は考え直したと思っっているのか安堵の表情だが、そんなわけはない。

「……カーネ、指」

ただそれだけ。

何を言っているのか理解していない反逆者はかなり哀れだが、エリュテイヤ様に逆らうことの方が絶対的に恐ろしいので、同情は胸の内にしまつて鞘から剣を抜いた。

まったく躊躇せずに、その刃を振り下ろす。

ぼとり、と何かが落ちた。

「うあああああああつ！！」
「ひいつ！？」

反逆者の片手の指が直線的に切られ、そこから先がなくなっていた。落ちた指は芋虫のようで、どちらからも赤い鮮血が吹き出、床に血溜まりを作り上げている。

絶叫する一人と、壁まで後ずさっているその仲間は、本当に哀れだ。まあ、自業自得というやつだが。

そんな中でにこにここと、まったく表情を変えないエリュティア様は本当に尊敬する。あんな風になりたいとは絶対に思わないが、どんな時でも冷静にいれるとればそれは騎士に必要なだ。

この反逆者は馬鹿だ。エリュティア様の見かけに惑わされすぎている。俺も最初は何でこんな少女が側近なんだ、とは思ったが、今では全力でその第一印象を訂正する。

冷酷無慈悲で、逆らうことなど絶対に許されない拷問官。
楽に死にたかったら逆らうんじゃねえぞ

騎士団の一人の言葉が、かなり身に沁みる。

【黒き民】は姿こそ人間そっくりだが、寿命は三倍ほど。あの顔をして俺よりも年上な可能性が高い。

ちなみに年齢を聞いたら満面の笑みで無言だった。人生最大の恐怖を味わった。女に年齢を聞くものじゃないと悟った。

「早く言った方が身のためだよ？ 次は片腕ごっすり逝っちゃうからね。」

にこにこにこ。

言っておくが、これはまだ生易しい分類に入る。本来なら城のエリュティア様専用の牢にという名の拷問場へ連れて行かれ、薬やら毒やら契約している水竜の力やら、何でも使ってこれ以上はないであろう苦痛を味合わせられる。

ならず者が多い帝国の騎士団、魔術使団が結束しているのはこの人に対する畏怖と言っても過言ではない。

曰く、「発狂せずに拷問所を出ることは不可能」、「あの人に逆らう時は血が繋がっている全ての親族の了承と、一言でも会話を交わしたことがある知人の了承を得る必要がある」、「逆らうくらいなら自殺して自分の命で終わらせる」等々。

簡単に言くと、逆らえば目の前で親族や知人が無残に殺され薬やら毒やらの揃いすぎている拷問器具によって拷問され殺してくれと頼んでも殺されずに生き地獄を味合わされ発狂してからも延々と痛みを受け続けることになるぞ、というかなり長い忠告が出回っているらしい。

そして、それを本気でしそうな気がするからこそ誰もこの人には逆らわない。

王族も恐ろしいが、エリュティア様も恐ろしい。どちらも恐怖と言うのも生易しい別次元の感情を抱く。

「エ、エリュティア様っ、わたくしたちは本当に
「両腕」

無言で切り裂く。

そういえば、俺が騎士団に入った頃にはエリュティア様は既に第一皇子の側近で、最初に人を殺す命令をしたのもエリュティア様だ
と思い出した。

その引き金がこの狂ったような悲鳴なのだから、どうなのだろう。

あの時からエリュティア様はまったく変わらず、にこにここと笑い
続けている。

「まあ、理由がどうであれ殺されるんだから、早く言って楽に死の
うよ。後ろに黒幕なんていないことはわかってるしい。聞きだす必
要もないから殺して終わりにしてあげようと思ってるんだけどなあ」

この人に騎士団に入ってからずっと付いているから俺は騎士団長
になれたのだろうか。

この人の傍にいると否が応でも精神的には屈強になりそうな気が
する。

そして、悲鳴は高らかに響く。

反逆者に制裁を（後書き）

一言。

私はエリユテイアが大好きですっ！！

これぐらいじゃグロくない、こんなの残酷表現じゃないっ！

本当はエリユテイアのみで拷問を書こうとしたんですけどあまりにもエリユテイアが悪役っぽかったので断念しました。

カーネを育て上げたのはエリユテイアです。カーネをグレさせたのもエリユテイアです。カーネ及び騎士団、魔術使団に人を見かけで判断するなを教訓とさせたのもエリユテイアです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4996o/>

誰かが紡ぐ御伽噺。

2011年1月27日07時42分発行